

川崎地区創立70周年記念誌 別冊

[Separate volume of The 70th Anniversary Magazine 2022]

祝 姉妹都市スカウト交流締結 40 周年記念

Baltimore-Kawasaki 姉妹都市スカウト交流の誕生秘話

The story behind the start of Baltimore-Kawasaki

Sister Cities Scout Exchange Program

And Introduce of International Committee



International Committee
Boy Scout Kawasaki District
Kanagawa Scout Council, SAJ



Baltimore-Kawasaki 姉妹都市スカウト交流の誕生秘話

長谷川博之 濱田 雅弘 堂本 暁生



川崎地区の特徴を代表する米国 Baltimore 地区との姉妹都市スカウト交流が今年で 37 年になるが、その生い立ちを振り返ってみたいと思う。

何故ボルチモア交流派遣が提案されたのか？

そもそものきっかけは、一つや二つではなく、多岐にわたるもの。

当時の記憶を辿れば、「外国かぶれの、イケイケ集団であった長谷川博之・濱田雅弘・堂本暁生」の3名が川崎地区独自で海外派遣を実行したいと考えていたこと。いつか、「必ず海外のスカウトと自由に交流することが出来る」の思いを、地区委員長である近江廣之氏に相談したところ、興味ある提案であることから、川崎市に太いパイプを持つ古尾谷盛太郎協議会長に繋がり、川崎地区の新たな活動として具体的な検討に入ることとなった。



肝心の交流先については、川崎市の後援を得ることを前提にすることから、姉妹都市でありボーイスカウト活動が盛んな米国メリーランド州ボルチモア市を選定した。

当時の近江地区委員長の回想録には「1984 年 10 月に当時のボルチモア市長であった Mr. William Donald Schaefer 氏（後に州知事）が来川したパーティーに招待もされていない近江が会場に乗り込み直談判してボルチモア市の姉妹都市委員会担当者の Ms. Jean Jan Buskirk さんを紹介され、後日川崎市を通じて話を進めることで一致した。」とあります。

推進する立場の関係者が、今では考えられない少々強引とも思える手法で目標に突き進む古き良き時代であったのでしょう。

偶然なことに、長谷川・濱田・堂本は川崎地区の野営行事委員として活動しているかたわら、それぞれ海外プロジェクトエンジニア・貿易業務・旅行代理店の担当者として勤務しており、比較的海外との接点が多い事も手伝い、交流派遣構想準備は順調に進むことができた。

近江地区委員長も含め我々は 30 歳代であり開拓精神旺盛な時期だったこともこの困難な事業が実現にこぎつけられた要因の一つだったと思う。

このようにして、関係者の想いを行動に変え、周囲の強力な援助を得てこの交流派遣が始まることになる。

現在ほど、通信手段が便利でない時代、海外との通信は高額であり、十分な英語力もないまま、手探りでボルチモア市役所、ボルチモア地区の協力を受け様々なプログラムを立案する。その一つひとつが、スカウティングそのものであったと今でもそう思う。

まさに、自分達のニーズを自分達の手で具現化する作業は苦難の連続でもあったが、そのこと自体が楽しくもあった。

どのような方法で実現したか？

多くの計画は「目的」「体制」「予算」「日程」等が重要な要素となるが、第一回目の川崎地区の海外派遣、海外渡航が一般的になりつつある時代と言っても、まだ為替は 250 円/\$ くらいであり特別なプログラムであると言っても過言ではなかった。したがって単なる「想い」だけでは実現は難しく、最も大きな課題であったのが、予算の策定であった。

せっかくボルチモア訪問をするのであれば、米国ナショナルジャンボリーが最寄りの AP Hills で開催されるためジャンボリー会場の訪問もしたい、交流したい、米国周辺都市の視察もと盛りだくさんにしたい、しかし、参加費は安くしたいと

の板挟み状態となり、川崎市へ助成をお願いすることにした。

幸い、その当時は川崎市にも姉妹都市委員会が設置されていたことから、市長メッセージを持参のうえ、ボルチモア市を訪問とすることにより川崎地区のボーイスカウト単独のプログラムとならない形式、すなわち姉妹都市交流としての位置づけでスカウト交流ができることになった。

本プログラムを実現するには、当然のこととして、今までのような「勢い」だけで突き進むことはできず、多くの方々の援助と協力を得ていよいよ具体的な派遣隊の編成となる。



記念すべき第一回の派遣隊隊長には井上一彦（故人）、副長には堂本暁生（現・国際委員）、また隊員には現在でも地区役員や団委員長として活躍しているが、実に多士済々の顔ぶれであった。

堂本副長は、その実旅行会社の社員であり、添乗員として業務渡航であったがこの点も費用を削減する苦肉の策として取り分け隊の通訳や移動時には大変な役割を果たしたことは言うまでもない。

ここで第一回派遣隊の堂本氏による思い出の一端を紹介しよう。

第1回派遣時の苦労エピソード

第1回派遣から35年のもの歳月が経ちますので記憶が薄らいでいますが思い起こすと、とにかく毎日が初めてのことであり緊張と重圧の連続でした。

ボルチモア在住日系Dr.カシマ氏邸での歓迎会、アダミアックMS達のホームステイやプログラムなどの献身的なホスト、ボルチモア側公式行事、市庁舎ヘドナルドシェファーマー市長の表敬訪問、雄大なアメリカナショナルジャンボリー見学、DRフルカワご夫妻の滞在中のご協力などが記憶によみあがります。満足な語学力もないまま、異文化に戸惑い井上隊長と何度も汗をかいた事を思い出しました。

特に記憶があったのは、公式行事の最終ボルチモア市庁舎へ表敬訪問をした日でした。

ボルチモア市長へ川崎市市長の親書を井上隊長がお渡しさせて頂き、スカウトには、ボルチモア市長からボルチモア名誉市民賞をひとりずつ渡され感動と緊張が続きました。



第一回派遣隊 1985年

この日の公式行事を無事に終えホームステイ先に戻ったら井上隊長は、何も言わず制服を着たままベッドに倒れ寝てしまいました。夕食時間になっても全く起きる気配がなく、朝まで寝ていました。緊張の連続で大役を果たし、精根尽き果て寝てしまったと思いました。

今改めて思い起こすと、この派遣がスカウト相互交流の基礎を作り、三十数年間の歴史を作ったと確信しました。

軌道に乗るまでの苦労と喜び

第1回の派遣隊の指導者は前述のように緊張と重圧の連続であったわけであるが、経験が生かされて第2回の受け入れプログラムが展開されることになる。

しかし、地区としても初めての経験であり、HFへの説明も、滞在中のプログラムも、受け入れる体制も今思えば十分ではなかった。だからこそ、ボルチモア側も川崎側も互いの立場を尊重し、一つひとつ解決し成功に導いた。このお互いの立場を尊重し何事にも対処してきた歴史が、現在にも生きているのだろう。



この後我々は 10 周年までの成功を目指し、第 3 回に近江隊長以下 15 名、第 4 回に Robert Williams 隊長以下 15 名、第 5 回に濱田隊長以下 15 名、第 6 回に Howard Rutherford 隊長以下 16 名、第 7 回には長谷川隊長以下 13 名、第 8 回には Ray Allen 隊長以下 12 名、第 9 回には小池隊長以下 20 名、第 10 回には Eugene Ruhl 以下 17 名という派遣隊の相互訪問が毎年繰り返された。



その結果、訪米時には Broad Creek Memorial Reservation キャンプ場での合同キャンプとホームステイ、来日時には Funny Bear Camp と呼ばれる合同キャンプと富士登山ならびにホームステイが定着化し、現在もこれが基本プログラムとなっている。



それでも、このプログラムを長く継続させるためには、相互に遠慮があってはならず、推進する原則として、「カイゼン（改善）」に取り組み、そのためには相互の意見を出し合い、理解し合うことが合意された。現在も行われている訪問地での「Leader's Meeting」はその一つである。

現在のスカウト交流派遣は、少しの変更はあるのだろうが全体的なプログラムは完成形に近づきつつあると考えている。



本プログラムを推進してきたコーディネーターの一人として軌道に乗るまでの苦労については、その時々に対応に追われ、最善と思われる選択をしてきたことがそれにあたるのかと思うほどに苦労と感じていない。

国際社会への飛躍

さて、草創期を 10 周年までと位置付けるとするならば、そこに参加したスカウトが国際社会へ飛躍した一部を紹介したい。

第 8 回（1992 年）派遣隊の参加スカウトであった Chris Yakaitis 氏は二年後に指導者として再来日、日本文化に興味を持ち、大学を卒業後英語教師として岡山県で教鞭をとった。



また、第 9 回（1993 年）派遣隊に参加した折笠彰氏は、自分の夢を追って留学のために渡米、その後インダストリアル・ライト & マジック（ILM）に就職しジョージ・ルーカスの映画スターウォーズの制作にテクニカル・ディレクターとして携わり、家族を持ち米国で活躍をしている。



この二人の例のほかに、このプログラムをとおりして国際社会に飛び出し、留学・就職・国際結婚など自己の人生に大きな影響があったスカウトも多い。それぞれが自身の人生指針を求めた結果であろう。

この素晴らしいプログラムに参加した沢山のスカウトは、人生に残る特別な思い出を持ったと思う。

それは多分に「思い出は時間の経過と共に美化される」からなのかも知れない。

限りない未来に向けて

世界的に大流行している COVID-19 の対応はこの活動を展開するにあたり、新たな脅威、悩みとなっている。

現代のキーワードとなっている「持続性」、SDGs

の開発目標、Safe from Harmなどの取り組みなどは現代社会で求められている重要な項目となっている。

2021 年に延期された東京オリンピックのビジョンの一つに加えられた、多様性などを含めた従来にない様々な事項を考慮することが新たな課題となるのだろう。

私たちの喜びは、スカウト自身が異なる環境、文化、考え方を体験し、それを自分自身で考える良い機会の提供ができることである。

且つ、スカウト自身がこのプログラムを通して互いを認めあうこと、そして更なる成長にとつな

がる場となれば、それに代わる喜びはない。

当時から現在まで変わらないモットーとして「より良い試行錯誤」がある。このところのコロナ騒動で 2020 年から 2022 年の間の相互訪問が延期となっているが、双方の指導者とスカウトが協力してバーチャル WEB 交流を実施している。

これまでも、そしてこれからもこの試行錯誤の気持ちを持ち続けたい。

そして今年こそ第 29 回 Baltimore/川崎 姉妹都市スカウト交流が再開できることを、関係者一同が望んでいる。

(完)



30 年目の再会 (2019 年 11 月)

Rutherford 家 来日歓迎会にて



The story behind the start of Baltimore-Kawasaki

Sister Cities Scout Exchange Program

By Hiroyuki Hasegawa, Masahiro Hamada and Akio Domoto



We would like to look back on the early days of the 37-years of the sister city scout exchange with the Baltimore Area Council in the United States, which is now the feature program of the Kawasaki District.

- **How was the Baltimore exchange delegation proposed?**

There were a broad range of motives in the first place, not just one or two.

As we trace the memory of those days, we, Hiroyuki Hasegawa, Masahiro Hamada and Akio Domoto, who were "xenophilia and active" men, wanted to carry out overseas dispatch independently in the Kawasaki District. Once we consulted with Mr. Hiroyuki Omi, who was the District Chairman then, about the idea that "how we can always interact freely with overseas scouts". Mr. Omi was also interested this proposal, so he contacted to the Council Chair, Mr. Seitaro Furuoya, who has a connection with the Kawasaki City Government. Then it started further examination as a new program in the Kawasaki District.



As for the important exchange destination, we selected Baltimore City, Maryland, USA, which is a sister city and has active Boy Scouting, on the premise that it can be sponsored by Kawasaki City.

According the memoir of the then District Chairman Omi, "In October 1984, I was not invited to the welcome party by Kawasaki City for Mr. William Donald Schaefer (later the governor of Maryland) who was the Mayor of Baltimore, but went to the venue to attempt a direct talk. And I was introduced Ms. Jean Jan Buskirk, who was in charge of the Sister City Committee of Baltimore City, and I agreed to discuss the plan through Kawasaki City in the later date. "

It was probably good old days in which a person who involved in the planning could pursue their goals in a way that seems difficult nowadays.

Coincidentally, Hasegawa, Hamada, and Domoto were serving as the Outdoor Program Committee members in the Kawasaki District, also each of us were a overseas project engineer, a trade operator, and a travel agency personnel, respectively, and all of us were relatively in contact with overseas. With those background, preparations for the exchange dispatch concept were able to proceed smoothly.

Including the District Chairman Ohmi, we were all still in their thirties and had a strong pioneering spirit, which seems one of the factors that made this difficult project a reality.

In this way, our thoughts and dream turned into actions, and this exchange dispatch began with the strong support of those around us.

Back in the time when communication methods were not as convenient as now, communication with foreign countries was expensive, and without our sufficient English proficiency, various delegation programs and activities were planned with the cooperation with the Baltimore City and the Baltimore Area Council. We still believe it was exactly what "Scouting" was.

Indeed, the task of embodying our needs with our own hands was a series of hardships, but it was also fun itself.

- **How did we work out this program?**

Generally, in planning, "purpose", "system", "budget", "schedule", etc. are the important factors. When the first Kawasaki district overseas dispatch program was planned, it was an era that overseas dispatch and travelling from Japan were getting popular, but it was still "a special program" because of exchange rate was 250 yen per one US dollar. Therefore, it was not easy to conduct the program just with our all wishes but also need to consider how to stay within our budget at first.

It was precious opportunity to visit Baltimore, so we wanted to visit the US National Jamboree which will be held at AP Hills, more exchange experience with US scouts, and more visiting US cities around Baltimore, but we needed keep mind in the budget, so we asked Kawasaki City for subsidy.

Fortunately, Kawasaki City had already set up a sister city committee for Baltimore City, so we managed our delegation by bringing a letter from the mayor of Kawasaki and a courtesy visit to Baltimore City. We made this program not just for Boy Scouts of the Kawasaki District, that is, as a sister city exchange. By doing so we made it possible the Scouts exchange program.

As a matter of course, in order to actualize this program, it was not possible by pushing forward with the "momentum" as we used to do before, but with the support and cooperation from many people, it became possible to organize a specific delegation.



Mr. Kazuhiko Inoue (deceased) became the memorable first Delegation Scoutmaster, and Akio Domoto (currently a member of the District International Committee) was the Assistant Scoutmaster. Many of scouts who joined the 1st contingent are still active in scouting now as the District Board members or the troop chairpersons.

Assistant Scoutmaster Domoto is a professional travel agency personnel so he became a tour conductor for the contingent as his business trip in order to reduce travel costs, but it goes without saying that this point also played a major role when the delegation travelling.

Following, we would like to introduce Mr. Domoto's part of the memories of the 1st Delegation.

- **Episode of troubles at the first Delegation**

"It's been about 35 years since the first delegation was dispatched, so my memory is getting fade out, but when I recall it, that everything in every day was my first time, and I had been always faced to tensions and pressures.

The Welcome party at Dr. Kashima's residence in Baltimore, devoted hosting of homestays and programs by Ms. Adamiac and many others, the official events by the Baltimore side, A courtesy visit of Mayor Donald Scheffer at the city hall, A magnificent tour to the US Scout National Jamboree, and many support by Dr. and Mrs. Furukawa during our stay are remembered.

I remembered that I faced many confused situations in the different cultures and got cold sweat many times with my fellow Scoutmaster Inoue due to our poor foreign language skills.

I especially remembered the day when we paid a courtesy visit to the Baltimore City Hall for the final official events.



Scoutmaster Inoue handed the letter of Kawasaki mayor to the Baltimore mayor, and our scouts were given the Baltimore Honorary Citizenship Award one by one from the mayor of Baltimore. It was quite excitement and tension had continued.

After everything official events had completed successfully of the day, and returning to his host family, Scoutmaster Inoue fell asleep on the bed with his uniform on without

saying anything. He didn't wake up at all for dinner time and slept until next morning. He accomplished a big role of responsibilities and seemed completely exhausted.

When I recall again, I am convinced that this delegation laid the foundation for the mutual scout exchange and made it possible a history of more than thirty years."

- **What was hard and joy for us until get the program on track**

As we mentioned above, the leaders of the 1st Delegation experienced a series of tensions and pressures, but their efforts were paid off to proceed the following year as a host.

However, as we recall now, it was the first experience for us as a host district, and we were not enough to do explanation to the Host Families, preparation the program during the guest stay, and organizing our hosting group. That is why both Baltimore and Kawasaki sides respected each other's positions and solved together every issue to succeed. This procedure may our procedure how to continue our program today.

After the 2nd contingent (Dr. William E. Jacobus, 2 Leaders, 8 Scouts), we aimed for keep success the program for next 10 years; as following years visiting with 15 members under Scoutmaster Omi in the 3rd, 15 members under Scoutmaster Robert Williams in the 4th, 15 members under Scoutmaster Hamada in the 5th, 16 members under Scoutmaster Howard Rutherford in the 6th, 13 members under Scoutmaster Hasegawa in the 7th, 12 members under Scoutmaster Ray Allen in the 8th, 20 members under Scoutmaster Koike in the 9th, and with 17 members under Scoutmaster Eugene in the 10th, the mutual visits by the contingents were repeated every year.



2nd Delegation from Baltimore 1986
Dr. William E. Jacobus & Scouts



5th Delegation 1989
Hamada, Scoutmaster

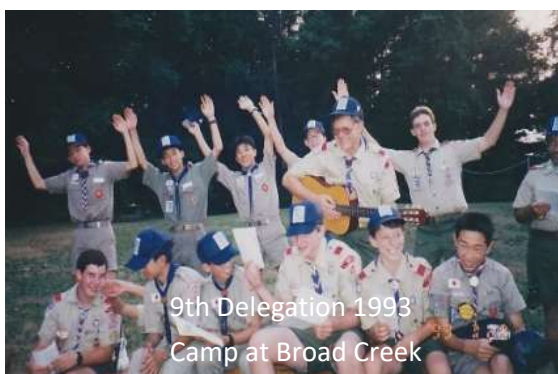


As a result, a joint scout camp at the Broad Creek Memorial Reservation campsite and homestay programs became entrenched whenever Kawasaki scouts visit the United States, and on the other hand, a joint scout camp called Funny Bear Camp, climbing Mt. Fuji and homestay programs became entrenched whenever Baltimore scouts visit Japan, and those are still our core programs.

Nevertheless, in order continue this program for a long time, it must not be reluctant to each other, and as a principle to promote, it is agreed to work on "*Kaizen* (improvement)". For that purpose, exchanging opinions and understanding each other are essential. One of them is the "Leader's Meeting" that is still continue nowadays to be held while the delegation program.



7th Delegation 1991
from left, Dr. Arifuku, Domoto,
Hasegawa, Rutherford, Cook



9th Delegation 1993
Camp at Broad Creek



Mt. Fuji climb

The current scout exchange delegation, we believe, that the overall program is nearing perfection, although with minor changes.

As one of the coordinators who promoted this program, we don't feel that it was when we chose the best solution as we believed at that time, because we were so busy to deal with time to time.

Perhaps it is because "memories are glamorized as time goes by."

- **Towards an endless future**

Nevertheless, the countermeasure to COVID-19, which is affected all over the world, has become a new threat and concern in continuing our activity.

"Sustainability," a common keyword in modern days, SDGs development goals, and initiatives such as "Safe from Harm" program are also our important matters required in modern society.

It will be our new challenge to consider various unprecedented matters including a diversity, which was added to one of the visions of the Tokyo Olympics which was held in 2021 as postponed.

Our pleasure is when we can provide our Scouts good opportunities to learn about different environments, cultures and thoughts and they can grow themselves to think how they can give feedback.

Moreover, when the scouts can understand and respect each other through this program and keep further growth, there is no substitute joy.

Since the early days, "Better trial and error" is our motto that has not been changed. The recent COVID-19 pandemic has forced postponing mutual visits from 2020 to 2022, but both leaders and scouts are collaborating to conduct virtual web exchanges.

We want continue to keep having this spirit of "trial and error".

And all the people wish that the 29th Baltimore / Kawasaki Sister City Scout Exchange will be resumed upcoming year.

On closing, we must keep moving toward for the future, but we also have to consider about the future as a sustainable activity by answering the question "why this activity is necessary?", and keep improving the current program.



30th Anniversary Reunion, on November 2019

The Rutherford Family Welcoming Party



Original article in Japanese has written in Spring 2022

70th Anniversary Magazine, Boy Scout Kawasaki District

Kanagawa Scout Council, SAJ

English Translation by Satoko Kajima Best

Editor's note

The Boy Scout Kawasaki district celebrated 70th anniversary in 2021. And about half of that period includes sister city scout exchanges between Kawasaki and Baltimore. We will take this opportunity to introduce story behind the start of this program.

The translation was done by Satoko Kashima Best of Crew 3776 BAC. Thank you from the bottom of our heart for translation.

Hiro Hasegawa, Mac Hamada, Akio Domoto

April 23 2022

Baltimore-Kawasaki Delegation 誕生の歌

1985 年夏、川崎市・ボルチモア市スカウト交流派遣プログラムが始まった。
今から 40 年も前の出来事として記憶に留めるものだけでなく、今もなお、両市のスカウト
たち、ホストする家族たちが楽しく集うプログラムとして定着した。

何もかも、手探りで作り上げたあの頃、国際交流が今ほど一般化していなかったときに、
あふれる情熱と勢いだけを頼りに始めたものの、切れ目ない試行錯誤の連続で私たちはより
良い交流派遣となるよう知恵を絞った。

川崎とボルチモア相互の関係者が真剣に議論を重ねたその時に、様々な思いが交錯してこ
んなフレーズが浮かんだ・・・

『このプログラムが長く続けられることを願い、そして国境を越えて手をつなぎ、共に平
和な世界を築きあげよう。そんな未来を一緒に作ろう！』の願いを込めて作った言わばこの
プログラムのテーマソングである。

当時、バンドメンバーとして活動していたボーイスカウトの仲間である長谷川博之氏が作
曲を担当し、作詞を濱田が、更に同バンドの仲間でスカウト OB でもある堀田信彦氏がアレ
ンジして[Make a Peaceful World]が交流派遣開始 2 年後の 1987 年に完成した。

今は思い出の地となった SAJ 山中野営場や Baltimore Area Council が所有する Broad
Creek Scout Reservation でのキャンプ、富士山登頂チャレンジ登山など思い出に残るプログ
ラムの数々を心に刻みこんで歌ったものである。

そして、続く 1988 年 Baltimore Scout 達が来訪する年に、川崎のスカウトたちが待ちきれ
ない気持ちと最大級の歓迎の意味を込めて長谷川・堀田氏コンビが作曲した曲が「Pepsi
Boys Coming」である。

この曲は交流に参加した Baltimore Scout 達がリーダーの目を盗んではどこかへ行ってしまう
という、まるでペプシの泡のようだとおちゃめなスカウトをテーマにして軽快なリズムの
歌に仕上げている。この背景には、Pepsi Cola が「若さ」をアピールする飲料であり、クー
ルでトレンドイヤーなイメージを持つことから採用されたもの。

歌詞には、山中野営場で繰り広げられ Funny Bear Camp と Broad Creek での楽しい思い出
が表現されており、聞くたびに様々なシーンが蘇る。

これからも持続可能なプログラムとして長く継続して欲しいと願うばかりである。

2025 年 7 月

日本ボーイスカウト川崎地区協議会

濱田 雅弘

Make A Peaceful World

For Kawasaki/Baltimore Scouts Delegation

Music by Hiroyuki Hasegawa (June 1987)
Words by Masahiro Hamada, Nobuhiko Hotta
Arranged by Nobuhiko Hotta

This song to commemorate our 40th
anniversary and to dedicate to everyone
involved over the past 40 years.

[Verse-1A] Now begin to be continue this opportunity,
And wish to be had friendship forever and forever.

Chorus. We live in Kawasaki and you live in Baltimore,
Here we go! Toward in the future,
Hand in Hand Make a Peaceful World and Friend Together,
Baltimore-Kawasaki Delegation.

[Verse-1B] Holding hand with mind each other to make a friendly
Harmony, We are the brother in the name of the world

Chorus.

[Verse-2] Now I can Rember singing in the night,
And I want come back to be hear with my friend memory

Interlude

Chorus × 2 times

さあ、今から始まるこの機会をとおして、いつまでも
変わらぬ友情が続くことを願っています。

私たちは川崎に住み、あなたはボルチモアに住ん
でいます。さあ、未来へ！
手をつないで平和な世界と友情を共に築きましょ
う。
私たちはボルチモア・川崎代表团です。

心をつなげて手をつなぎ、友好のハーモニーを
奏でましょう。
私たちは世界の名において兄弟です。

今、私は夜に歌っていたことを思い出すことができ
ます。そして、友の記憶と共にここに帰りたいたので
す。

Pepsi Boys Coming

Thema for Funny Bear Camp of Baltimore-Kawasaki Sister City Scouts Exchange Program.
This song dedicated to mischievous boys who scatter soon like bubbles of Pepsi from leaders !!

July 1988
Presented by International Committee, Kawasaki District.
Words & Music by N.HOTTA & H.HASEGAWA
[Reconfirmed in July 2025]

[Chorus]
Pepsi boys coming to my town. HISASHI-BURI-DANE shake hands.
They are coming from Baltimore, KON-NICHI-WA again.

[Verse-1A]
Remember camp in "Broad Creek" together: Remember fishing and swimming together.
We had a camp fire with "Funny Bunny". It seems just like yesterday.

[Verse-1B]
When you are going to the "Yamanaka Camp",
We believe that you can make a beautiful memory.
Birds are flying in the sky. Sunshine reflects in your eyes.
Let's enjoy this camping for the best friend-ship again.
It's just the "Funny Bear Camp Yamanaka". Friend-ship come again.

[Interlude]

[Chorus]
Pepsi boys coming to my town. HISASHI-BURI-DANE shake hands.
They are coming from Baltimore, KON-NICHI-WA again.

[Verse-2A]
We will try to make rafts together. Also try to get some kind of fun.
We may have camp fire with "Funny Bear". It's not different from last time.

[Verse-2B]
After you climb Fuji-Yama through the night. You can get the lovely sun rise in the morning.
Birds are flying in the sky. Sunshine reflects in your eyes.
Let's enjoy this camping for the best friend-ship again.
It's just the "Funny Bear Camp Yamanaka". Friend-ship come again.

[Chorus] x 3times → ending

ペプシボーイズが僕の町にやって来る。
握手を求めてヒサシブリダネといいながら。
彼らはボルチモアから こんにちは と言いながらや
ってきた

Broad Creek で一緒にキャンプしたのを覚えてる
かい？ 一緒に釣りをしたり泳いだりしたのを覚えて
るかい？ 「ファニーバニー」と言いながらキャンプ
ファイヤーをしたのがまるで昨日のことのようだね。

“山中のキャンプ場”に行くなら、きっと素敵な思い
出ができると思うよ。
空には鳥が舞い、瞳には太陽の光が映える。
最高の友情を育むキャンプをまた楽しもう。
まさに“Funny Bear Camp”では素敵な友情をま
た作れるんだ！

ペプシボーイズが僕の町にやって来る。
握手を求めてヒサシブリダネといいながら。
彼らはボルチモアから こんにちは と言いながらや
ってきた

一緒にいかだ作りに挑戦しよう、楽しいことに挑戦し
よう。難しいことなんかないよ。
Funny Bear のキャンプファイヤーをしてみよう。

夜通し富士山を登った後は、朝日が昇るのを眺める
ことができるんだ！
空には鳥が飛び交い、太陽の光が目映る。
最高の友情を育むキャンプをまた楽しもう！
まさに“Funny Bear Camp”では素敵な友情をま
た作れるんだ！